
十二人の姫君

紗妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二人の姫君

【Nコード】

N8455A

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

ルーヴェラント王国の名君レノワが身罷ってから300年の歳月が過ぎ去っていた。永世和平国家としての地位は確立されて久しいが、新たな危機がルーヴェラントを襲う。十二人の姫達は、平和のための生け贄となるしかないのか？武力の後ろ盾なくして平和は語れないのか？「ルーヴェラント」流れ星の伝説」の短い続編です。

第1章 困惑

強大な敵、舞い降り、国、滅びの危機を迎えし時

月と夜の神現れ、敵を殲滅せり

月の神はルーヴェラントに降臨し

平和の礎となりぬ

「……これは、我が国ルーヴェラントに伝わる一つの伝説ですが、歴史上の事実に裏打ちされたものです。ご存知ですか？」

家庭教師ネムの質問に、ルーヴェラント王国第四皇女エプリラは、何度か眼を瞬かせた後、細い首を傾げた。

「えつとお……」おっとりとした喋り方は、襟元の開いたドレスの背に流れ落ちる長い栗色の巻き毛に良く似合う。「月の神っていうのは、金のルーヴェエのことよね。でも……、金のルーヴェって、誰のことかしら」

土色の髪と瞳はルーヴェラント国民特有のものだが、それでも個人差はある。エプリラの髪は少し赤みのある色で、陽に透けると輝いて見えるのだ。

彼女の隣の椅子に腰掛け、退屈そうに頬杖を付きつつ、羽ペンでグルグルと落書きをしていた第五皇女メイは、大きな栗色の眼を上げ、姉を見た。

他の姉妹達と異なり、肩の辺りで切りそろえた短い髪と、青年のような服装が、彼女の快活さを物語っている。

「なんだ、エプリラ、知らないの？」彼女だけは、四人いる姉達を全て名前で呼び捨てていた。「約三百年前の国王だよ。輝く金色の髪と、若草色の瞳をしていたんだってさ。だから、金のルーヴェって呼ばれていたらしいよ」

「まあ。メイは物知りなのね」

「勉強好きといって欲しいね」自慢気に胸を張る。「地下室の書物庫には、たくさんの記録が残っているよ。直ぐに解った。ただね…

…」

メイは困惑の態で小首を傾げ、顎に指を添えた。

その様を訝しみ、エプリラが問う。

「ただ……？」

「書物庫には歴代の王の肖像画があるのに、金のルーヴェだけは、それが残っていないんだ」

「まあ……。なぜかしらねえ。金の髪なんて、とてもおもしろいかったでしょうに……」

エプリラはニツコリと微笑んだ。

とても愛らしい。それがメイの正直な感想だ。

ルーヴェラントの女性が美しいことは、周辺国でも専らの評判である。

確かに、それも頷ける。

だが、女は美しく愛らしいだけでいいのか？ しかも、今のこの国で……。

メイは、皮肉を孕ませて口許を歪めた。

「そうかな。私は、どんな大馬鹿者か、その顔を見てやりたかっただけだよ。綺麗な男なんて、気色悪いじゃないか」

ネムがギョツとして眼を見開く。

金のルーヴェの名を知る者は、皆、彼をルーヴェラントにおける比類なき名君として崇めている。それを捕まえて『大馬鹿者』呼ばわりだ。いくら皇女とはいえ、誰かの耳にでも入ったなら問題視されるに違いない。

けれど、当のメイは、家庭教師の挙動など全く意に介さぬ態だ。羽ペンを弄びながら言葉を継ぐ。

「ルーヴェラントの国王が代々有してきた神の力。未来を予知する能力と、自然の力を司る能力。それが男子にしか受け継がれないということ自体、私には納得のいかないこと。だが、それをどうこう言っても始まらないのは弁えている。しかし、男子を産めなかったお母様は、女子を十二人も産んだ挙句、ご心労の余り亡くなられたし、今、この国で唯一、神の力を有するお父様はご病気で寝たきり。しかも、国王の力自体が弱まっているとすら言われている。遙か昔の王の力は、数年後の未来を予言し、敵の襲来を阻むために山を切り崩し、河をも逆流させ得たといわれるのに、今では、せいぜい数日後の未来が予測できて、硝子のコップを割るくらい。今、この国からは、完全に神の力が失われようとしているんだ。それもこれも、三百年前に金のルーヴェが神の力を否定したせいだ。永世和平国家の宣言など、今では唯の美しい詩でしかない」

悔し気に唇を噛む。

その顔つきから、単に思い付きだけで金のルーヴェを非難しているのではないことは容易に想像できる。

「平和の国と言われながら、その実、この国はとても脆弱で、周辺国の脅威に怯えながら生きている。力さえあれば……。古の神の力さえ復活すれば、この国は……」

「メイ様。もう、そのくらいにしておきなさい。いくら皇女様でも、ご病気の王や、今は無き歴代の国王を悪し様におっしゃることは、感心いたしませんぞ」

ネムが年長者よろしく窘める。

「……すまない。つい、感情的に……」メイは頬を染め、素直に頭を垂れた。「ところで、先生。一つ質問があるのだが……」

「おや、なんですかな？」

「夜の神とは、誰のことなんだ？ 書物庫の文献をいくら紐解いてみても、解らなかつたんだ」

ネムの口許に苦笑いが零れる。

「伝説は、所詮、伝説ですからな。夜の神に関しては、ただの作り話、実在の人物ではないといわれておりますな。ところで……」眼鏡を外し、ハンカチで軽く拭く。「この伝説には続きがあるのですが、……メイ様は、ご存知ですか？」

「いや……」短く応える。

眼鏡を掛け直したネムは、その奥からメイをじっと見つめた。

「『信じよ、民。国、真に困窮し時、夜の神、再び現れ、必ずや国を救うであろう』……。このような言葉が残っているのです」

「……どういう意味だ？」

「解りません」

あつさりと答えるネム。

興味を惹かれ、身を乗り出しかけていたメイが、ガックリと肩を落とし、頬杖をつく。

「解らんでどうする。仮にも貴方は、国の知識の集積所といわれる大学院教授であろう？ 何のための学位か。まったく、頼り無いな」

ネムが肩を竦める。

「お言葉、ご尤もでございます」しかし、彼の顔には、悪戯な笑みが浮かんでいた。「されど、これは金のルーヴェが晩年に残された言葉であることまでは、私、突き止めておりますぞ」

「で……？」

メイが、再びにじり寄る。

それに反し、ネムは困惑気味に身を引いた。

「あ……、いや、それ以上は……」

はあっと大きな溜息。メイのものだ。

「しっかりしてくれよ、ネム教授。神の力を失った今、ルーヴェラントには、貴方達知識人のみが財産なのだからな」

「はあ……。申し訳ござりませぬ」

ネムは肩を竦めた。

隣では、エプリラが珠を転がすように笑っている。

この状況を笑えるとは、如何なることか……。
心の中で、そうばやきながら、メイは一人、深い溜息を落とした。

「この国がどれほど困窮しようとも、誰も助けになんか来てくれるわけがないんだ。まったく、バカバカしい。所詮、伝説は伝説でしかないのだから」

夜、王宮のバルコニーで夕涼みをしながら、メイは独り言ちた。

隣では、今年十三歳になる第八皇女オルガが星を眺めていた。明るい栗色の長髪が夜風にそよぐ。

メイは、その横顔に暫し視線を留め、次いで訊いた。

「オルガ、何をしてる？」

オルガは、夜空を見上げたまま、姉の問いに答えた。

「星が流れるのを待ってるのよ」

「なぜ？」

「お父様のご病気が早く良くなることと、何時までも、この国の平和が続くことを願うの」少し色の薄い瞳を姉に向け、ニッコリと微笑む。「星に掛けた願い事は、何時か、星が流れる時、きっと叶うって、そう言うでしょう？」

メイは深い溜息と共に、言葉を吐き出した。

「そんなの、ただの御伽噺だ。そんな戯言を未だに信じているなんて、オルガはまだまだ子供だな」

辛らつな姉のセリフに、オルガは拗ねたように言った。

「そんなことないわよ。お父様もお母様も、そう仰っていらしたんだから」

（だったら、なぜ、お母様は男の子に恵まれなかった？　なぜ、私は苦しまなければならぬのだ？）

メイは己の心の中で、妹の言に疑問をぶつけた。しかし、それを言葉にすることはしなかった。この国の王族の認識なんて、所詮はこの程度のもの。解っている。今更、幼い妹に当たっても仕方の無いことなのだ。

けれど、これだけは言わずにいらなかった。

「神なんて、いるわけがないさ。どんなに願ったって、願うだけで手に入る平和なんてあるはずが無いんだ。力があってこそその平和。我々ルーヴェラントの民は、そのことを嫌というほど思い知らされているではないか」

その呟きは小さくて、オルガの耳には届かなかった。

第2章 忍び寄る危機

数日後……。

何時ものように、家庭教師のネムから講義を受けていたエプリラとメイの許に、一通の書簡が恭しく届けられた。緊急の要件とこので、通常であれば邪魔するはずのない授業時間に割り込んできたものだ。無視するわけにもいかない。

扉側に座っていたメイが、急使の手から書簡を受け取った。

書簡の封を見て、眉を顰める。

メイの様子を訝しみ、エプリラが隣から妹の手許を覗き込み、訊いた。

「……どこからの？」

「タタイだ」

メイが短く答える。

その途端、エプリラとネム、両者が顔を顰めた。

……タタイ。

その名は、ルーヴェラントのみでなく、他の多くの国で、畏怖と嫌悪をもって口にされる。

遙か南東の小国でしかなかったタタイは、武力増強に力を注ぎ、ここ十数年の間に、ルーヴェラントの喉許にまで勢力を広げた軍事国家である。永世和平を唱えるルーヴェラントとは対極にある国で、しかも、持てる武力に物を言わせ、肥沃な国土を有する周辺国を、ことごとく傘下に治めるべく暗躍している。タタイの触手は、間違いなくルーヴェラントにも伸びようとしている。そのことは、常にちらつかせてくる武力と脅しによって明らかなことだ。

忌々し気に唇を噛みつつも、メイは書簡の中身に眼を通した。だが、ざっと眼を通す時間があつたらうか、突然、書簡を床に投げ捨てた。

「タイの王子、チタルめ！ 分を弁えず、何と不遜な……！」
噛み締めた奥歯の隙間から、苦々し気に言葉を搾り出す。

妹の様に暫し怯えるように身を潜めていたエプリラは、おずおずと問い掛けた。

「どうしたの？ タイは、何て……？」

メイは一つ深い溜息を吐き、次いで、足許から書簡を拾い上げると、文面を一字一句間違えることのないよう、読んで聞かせた。

内容は、要約すると以下のようなものになる。

『至急協議したき件あり。ルーヴェラント王国の存亡に拘わることゆえ、早急、内密にて御出で願う。もしも、御出で戴けぬ場合、あるいは、周辺諸国に我が国意を密告されたる場合、永世和平国家としての貴国の命運は保証しかねる』

読み終わるや否や、メイは書簡を手の中で丸めた。

「王子の分際で、一国の王に対し、出てこいだと……？ 無礼にもほどがある！」

吐き捨てる。

「来いといわれても、お父様は病床の身よ。どうすれば……」不安げなエプリラの呟き。

メイは憤懣も露わ、苦々し気に言う。

「こんな話、お父様が出向く必要などない。……私が行く」

「ダメよ、メイ。お父様の代理なら、私が行かなければ……」おつとりしながらも、姉の認識はあるようだ。「この城に残る最年長者は、お父様を除けば、私なのだよ」

「チタルなど、こちらが如何に礼儀を重んじようと、解るような奴ではない。それに……」メイの視線が不意に優しくなる。「プリエラ。貴女は来月には嫁ぐ身なんだよ。この旅で何かあったら大変だ。嫁ぎ先のオルフェーン国にも申し開きがたたないではないか」
言いつつ、心のうちで思う。

（チタルは、女に眼のない、淫欲男と聞いている。そんな所にエプリラを行かせられるものか。）

エブリラは、少し淋し気な視線を妹に向けた。

「ごめんなさいね、メイ。貴女にばかり、負担を掛けて……」
「気にするな。私が望んでしていることだ」

笑いながら、メイは言った。

男子を産めなかったことを悔やみ、母親が病の床に伏し、娘達の献身的な看病の甲斐も無く亡くなった時、国を担うべき男子のいないこの国で、国を守るのは自分だ、自分しかないのだ。メイは、そんな言葉を自分自身に言い聞かせ、腰まであった髪をばつさりと切った。男として生きるため、男の服を着て、言葉遣いもそうした。母が亡くなった日、女であったメイは死に、同時に、男としてのメイが生まれたのだ。

正直なことを言えば、時々姉妹達のように着飾ってみたい、女として生きてみたいと思うことが無いわけではない。だが、そんな気持ちは押し殺した。そうすることが、この国にとって必要だと思ったから。

自分が姉妹を護らなければ……。

この国を護れるのは自分しかないのだ。

その言葉が戒めとなり、鎖となってメイの心を縛っていた。それを辛いと思ったことは無い。ただ、時に、ふと、全てを投げ出したと思うことはあった。誰かに頼りたいと……。それが、叶わぬ夢であることは充分に弁えていたけれど……。

それから、月の半周期の後……。

メイは、男性用のチェスパに身を包み、馬に跨ってタタイに向けて出発した。

チェスパとは、ルーヴェラントの伝統的民族衣装であり、腰の部分を布や組み紐で緩く絞った長衣とズボンを合わせたもので、動き易いよう、長衣の両脇には、裾から腰まで深い切れ込みが入っている。今では、年に一、二度の祝賀行事以外では滅多に身に付けることの無い服である。メイが敢えてそれを選んだのには理由がある。

ルーヴェラントの伝統に則り、威厳を示そうとしたのだ。

タイ国への旅の始め、城の外門の外側を取り囲むように、他国から流れてきた流民の村がある。そこを通りかかった時、メイは無意識に、群集の一点に吸い寄せられるように視線を向けた。疲れきった民の中、独り、じつとメイを見つめる漆黒の瞳。更に凝視する。それは、僅か十歳程の少年であった。

メイはなぜか、その瞳に惹かれた。思わず声を掛ける。

「お前……、名は？」そんな自分自身に驚きを覚えながらも、言葉を継ぐ。「流民か？ 父上と母上は、何処に？」

少年は、無言のまま首を横に振った。

それを見かねたように、側にいた老人が少年に代わって答えた。

「恐れ入りまする、皇女様。この子は、口がきけんのでございます。気付いたら、たった独り、儂等の後を付いて来よりました。両親については、誰も知らないので……」

「そう、ですか……」年長者への尊敬の念は忘れないメイだ。相手が平民であっても、口調が丁寧になる。

老人は満面に笑みを浮かべ、言葉を継いだ。

「儂等は、遠く、ハッサンから、戦火を避けて逃げ延びた者にございます。ルーヴェラントは平和の国。これでやっと落ち着いた暮らしが

できます。ありがたいことでございます」

メイの口許には苦笑いが零れる。

（平和の国……、か……。異国の民には、この国が、そう見えるのか……）

「ご自愛召されよ」

それだけ言い残し、メイは国境へと向けて馬を駆った。頭を垂れる老人を背後に残して……。

「お召しにより参上いたしました。ルーヴェラント第五皇女メイ・フォルム・ルーヴェラントと申します。国王は病床の身ゆえ、失礼ながら私

が代わってご用件をお伺い致します」

タイ国の王宮内。

王宮とはいえ、剥き出しの石造りで野暮ったく、通常の王宮につきものの、美しさや華やかさ、厳かさすら、全て省いた実用一点張りの建物だ。近隣諸国でも一際美しいと評判のルーヴェラント王宮で育ったメイの眼には、ひどく素っ気なく映った。けれど、それを顔には出さず、王の玉座を眼前に深々と頭を垂れた。

玉座には、踏ん反り返るように腰掛ける若者の姿。タイ国王子チタルだ。

でっぷりとした臍を椅子に沈め、ニヤ付いている。

「おお、これはこれは、皇女殿。遠路はるばる、ご足労をお掛け致しましたな。ささ、顔をおあげくだされ」

粘つく声。

タイ如き野蛮国は、外交手段も知らぬか。代理とはいえ、他国王族の前に、己は玉座に踏ん反り返るとは、何事か！

メイは、心の中で毒づいた。

だが、顔を上げた時、そこには穏やかな笑み。

外交努力により、和平を手に入れたルーヴェラント。女といえど、幼い頃よりこの程度の演技力は指導されてきている。心と裏腹の感情を表に表すことくらい、雑作もない。

だが、それも、今回の相手には意味があるかどうか……。

チタルは、頭より臍を鍛えてきたのだろう、巨体の持ち主だった。通常、ゆつたりとしているはずの玉座が、狭苦しく見える。しかし、それ以外に誉められる事は何も見付からない。ただ飾りつけただけという派手な服は、この城の簡素さに余計に浮いて見え、さ

らに、下品としか言い様が無い。髪を通したのは何時かと訊きたくなるような解れた髪や、だらしの無い仕草は、口にするのも汚らしい。

外交手腕も、同等の知識人を相手にせねば何の意味も無いのか。メイは、一つ学んだ気がした。

しかし、対するチャールはといえば、メイの視線の先にいる己を意識してか、余計に胸を張ってみせた。それすら、メイの眼には無様にしか見えぬことを解りもせずに。

「ほう……」口許がいやらしく緩む。「男子の服装をされていても、やはり、ルーヴェラント皇女。噂に違わず、美しい」

通常であれば、此处で返礼として賛美の言葉の一つや二つ並べるところだが、そんな努力も空しい。メイは、率直に訊いた。

「して、ご用件は？」

瞬間、眼をむいたチャール。侮られていることは解つたと見える。スツと眼を細め、メイを睨め付ける。

「随分と、せっかちなお嬢様じゃ」

しかし、その程度の事でメイは怯みはしない。

「国許では、王が臥せております。一刻も早く戻りたく存じますゆえ」

一つ咳払いをして、チャールは頬杖をついた。

「そうか……。なに、大した用件ではない」

（大した用件ではないなら、手紙に認めれば良からう。出向いて参れと言外に匂わせてきたのは、そちらではないか）

齒噛みする怒りを、メイは笑みに隠した。

チャールは、更に椅子に深く凭れ掛かった。

「ルーヴェラントは小国なれど、大地の神の加護ある国の称号であり、豊かな国土をお持ちだ。狙っておる国も、数多おろう」

「我が国は、永世和平国家を宣言しております。それは、周辺諸国にも認められた権利」

何を今さら……。タタイ如き蛮国は、そのようなことも知らぬの

か。メイは再度心の中で毒づいた。

しかし、次いでチタールの口から漏れた言葉に、メイは愕然とした。

「そのようなもの、武力の前に何の意味を持つというのだ？　いくら貴国が永世和平国家を謳おうと、圧倒的な武力を持って襲われては、ひとたまりもあるまい？　襲われ、占領されてしまった後、他国の助けなど当てにはならん。……違うか？」

己の欲の前には、国際協調という言葉すら踏みつけにすることも厭わぬか？

メイは、顔を背けたまま、唇を噛み締めた。

「……と、まあ、そんなことを言う家臣達もおつての。しかし、武力で奪うというのは余りにも無粋」前屈みになる。「……どうじゃ。タイが後盾になってやろうか？　慈悲深いタイでは、ルーヴェラントとの更なる親交を望んでおる」

「……と、仰られますと？」

伺うようにメイが問うた。言葉の裏の思いは、交換条件は何か、ということ。

チタールが、にやりと笑った。

「ルーヴェラントの女性は、こよなく美しいことで名高い。どの国も、我先に娶りたがっておる」

「誠に、光栄の至り」

「第三皇女までは既に嫁がれた。第四皇女も来月には輿入れが決まっているとか。私もそれらの国と好んでことを構える気は無い」

何が言いたいのか。訝しみ、メイが眉を顰める。

チタールは、弛んだ口許に下卑た笑いを浮かべた。

「貴国には、姫が十二人おられる。だが、王になられるのは一人であろう？　残り全員とはいわぬ。まあ……、五人ほどでよいわ。私の後室に迎えようと思うのだが……、いかがか？」

瞬間、メイは凍り付いた。

「な……？」

「どうですか？ 悪い話ではないと思うが……」

舌なめずりする音が、不気味に響く。

今耳にした言葉が、冗談ではないことを認識するにつれて、メイの頭にカツと血が上る。

後室とは、妾のことではないか！ なんとる無礼！

しかし、相手の表情の変化すら読めぬものとみえ、チタールの粘つく言葉は続く。

「ずっと後室にというわけではない。後室に入った者の中で、私が最も気に入ったものを正式に王妃に迎えると約束しよう。我が国の後ろ盾があれば、貴国は安泰。姉妹で我が寵愛を競い合うなど、何とも美しい光景ではないか。考えただけでも、ゾクゾクするわい」

メイは俯き、白くなるほどに強く拳を握りしめた。それが、小刻みに震える。

「お戯れを……」

震えるメイに、やっと気付いたらしい。チタールは、少し意外といわんばかりに眉を顰め声を落とした。

「これは異なこと。何も、それ程驚かれるようなことでも無かるう。貴国では、平和とやらを維持するため、これまでもずっと、そうされてきたではないか。妻という名の人身御供として、姫を他国へ送る」

その瞬間、メイが僅かに顔を上げる。前髪の奥の栗色の双眸は鋭くチタールを睨み付けていた。その冷たい怒りは、さすがのチタールにも通じたらしい。居心地悪そうに椅子の上で躰を動かすと、少し早口に言った。

「まあ、今すぐに返事をされることは難しかろう。お帰りになって国王とご相談なされるがよい。きっと良い返事をくださるだろうよ」

第3章 苦悩

帰路、メイは馬を駆った。供の者が追いつけぬことなど意に介すことなく、ひたすら駆け続けた。

彼女の頬は、悔し涙に濡れていた。

悔しかった。口惜しかった。これほどまでに貧弱でしかない自国の力を呪った。

ルーヴェラントの平和など、所詮は、人の良心に縋ったものでしかない。その弱さ、脆さを、今日、痛感させられたのだ。

女を道具としか考えぬルーヴェラントに、玩具としか思わぬチタールに、そして、そう思いながらも、それをはね除けることの出来なかった自分自身に、ぶつけようのない怒りを、風を切ることで紛らわした。

何時しか、城の城壁が微かに見えた。

姉妹達に、こんな顔を見せる訳にはいかない。か弱い彼女たちを護れるのは自分しかないのだから。

メイは涙を拭くと、しっかりと顔を上げて正面を見据えた。

その視界を、突如、黒い影が横切る。

馬の手綱を引き、速度を弛めて眼を凝らす。

少年だ。

メイは、その顔に見覚えがあった。行き道すがら、城壁前で暮らす流浪者の中にいた黒髪の少年だ。近づくにつれ、印象的な漆黒の瞳すら確認できる。

真っ直ぐにメイを見つめる少年の瞳は、今のメイの戸惑いを射抜

いているようで、辛かった。

彼の脇を、そのままゆつくりと通り過ぎようとしたが、気付けば無意識に手綱に掛けた指先に力がこもっていた。馬を脚を止める。

「私に何か用か？」

気になり、問い掛けた。けれど、少年は無言のまま、正面からじつとメイを凝視し続けるだけ。

メイは苦笑いを漏らした。

「面白い子供だ。……私と共に、来るか？」

無意識に、そう口にしていた。

後で考えれば、その時、なぜそんな気持ちになったのか解らないけれど、その少年の瞳の奥に煌めく強さに惹かれた。それだけは確かだった。

僅かに迷ったが、決断は早かった。

「お前のように、強い瞳の者に出会ったのは初めてだ。気に入った。どうだ？ 私と共に来ないか？」

すぐに返事はないものと思っていたが、予想外に少年は素直にコクリと頷いた。

供の者に指示し、供の馬に同乗させると、そのまま城へと急いだ。口許には、微かに苦笑いが浮かんでいた。

「私も、相当ヤキがまわったものだ。伝説の『夜の神』は、きっとあの少年のような瞳をしているのではなからうか、などと、詮無いことを思ってしまうなどと……」

呟く言葉は、しかし、軽快に響く馬の蹄の音に掻き消され、誰の耳にも届くことはなかった。

城に戻るとすぐに、メイは姉妹を集めた。病床の父には聞かせられない。それを配慮しての独断だった。

集まった姉妹の前に、メイは、チャールの言葉の要点だけを伝えた。おっとりとした姉、まだ幼い妹達。とても、下卑た言葉をその

まま伝えることなど出来ない。

掻い摘んだ話を、皆がどれだけ理解してくれたのだろうか。

メイはふと不安になった。しかし、少し困惑気味の妹達が、お互いに小さく頷き合った後、口にした言葉を耳にした瞬間、胸が詰まった。

「解ったわ、メイ姉様。姉様が残って。私達には国を治める才能なんて無いもの」

「私達なら平気よ。私達が我慢すれば、この国の平和を保てるというのなら、それで……」

今年十五才になったばかりのジュリーに続き、セパが言った。彼女はまだ十一歳だ。

「何をバカな事を……」深い後悔に心が塞がれる。「そんな事、いはずが無い。誰かが苦しむ事でしか維持できない平和なんか、本当の平和じゃないんだ」

なぜ、こんなことを話してしまったのか。話せば、彼女達からどんな答えが返ってくるか、それは、初めから分かり切っていたではないか。

大人達の世界の汚い駆け引き。色と欲にまみれた協調。こんなもの、彼女達に聞かせるのは早すぎた。妹達にはまだまだ、流れ星に掛けた願い事がきつと叶うという幻を夢見ていて欲しい。

「ごめん、みんな。大丈夫、心配しなくていい。何も心配いらさない私に任せて……」

やっと創った笑み。それが涙で曇らないうちにと、メイは俯き、踵を返した。

しっかりとしなければ。自分自身に活を入れる。

自分しかないない。今、この国を護れるのは、自分だけなのだから……。

第4章 決断

星が零れるほどの夜空。

けれど、メイの瞳には、その美しさすら映らない。

バルコニーに置かれた長椅子に腰を下ろし、膝に両肘をついて、独り、物思いに耽る。

美しいルーヴェラント。この国を護りたいという思いは、誰よりも強いと自負している。けれど、そのために、過去、多くの国王達がそうしてきたように、この国の平和を王族の女達の涙であがなうことだけは嫌だった。国の平和と王族の平和。それらを一緒に叶えたい。

「力さえあれば……」

苦い思いが、呟きとなり、唇から零れる。

唇を強く噛む。

その時、背後に人の気付を感じた。頭だけで振り返ると、そこには黒髪の少年が佇んでいた。夜の闇の中なのに、僅かな月の光を反射した瞳がキラキラと輝いているのが解る。

「どうした。お前も眠れないのか？」

少年が頷くのを確認し、メイは片手で椅子に座るよう促した。

「眠れないなら、私の愚痴に付き合ってくれないか？」

なぜ、こんな事を言ってしまったのだろうか。不思議になる。姉妹達にさえ、愚痴など聞かせたことはないのに。

眼の端で窺うと、少年は長椅子にちょこんと座り、脚をぶらぶらさせながら、頭の後ろで腕を組み、夜空を眺めている。

流浪者の子供のくせに、大した度胸だ。そう思うと、自然、笑みが零れる。

同じように夜空を見上げ、独り言のように呟く。

「お前は、……どう思う？」

少年が聞いていようがいまいが、どうでも良かった。ただ、この胸の中の蟠りを言葉にすることで、吐き出してしまいたかった。

「ルーヴェラントは、良い国だ。この三百年余の間、戦火に見舞われることもなく、平和に暮らしてきた。しかし、その平和の裏に、王家の女達の悲しい歴史があることなど、誰も知らうとすらしない。王族の姫は、他国との友好のために、次々と嫁いでいった。ルーヴェラントの女性には美しいと評判だ。どの国でも喜んで娶りたがる。女達は、人並みに恋をする事すら許されなかった。平和の道具となるためにな」

深い溜息が、メイの肩を上下させる。

「この国には、金のルーヴェの伝説というものがあるんだ。三百年前、強大な力を有しながらも、それを決して遣わず、この国を永世和平国家に導いた賢者として崇められている国王だ。しかし、……私は、彼を賢者だとは思わない。力を否定する事が平和だとは思わない。力を持つてこそ、平和が約束されるのだ。神の力が失われし今、我々が手にできる力とは何か。……武力だ。武力さえあれば、タイのような野蛮な奴等に、好いように侮辱されることもないのに。私は、……私は、金のルーヴェが憎い」

前屈みで、己の両膝を拳で強く叩く。金のルーヴェが憎い。その思いは、同時に、力無い己に対する非難にも繋がっていた。

そのまま、膝を抱える。

心地よい微風に乗り、咲き誇る草花の甘やかな香りが心を癒す。

メイは、深く長い溜息を落とした。

「……すまない。こんなことを話しても、お前に解るはずもないというのにな……」形の良い唇に、自嘲を込めた笑みが浮かぶ。「なぜ、私はお前を相手に、こんな話をしてしまうのかな。……子供とはいえ、お前は男だ。女の私は、それに縋りたいのだろうか……？ バカな話だな……」

「あんたが望む平和って、いったい、なんなんだよ」

椅子を立とうと腰を浮かし掛けていたメイの動作が止まる。その

両眼は、驚きに見開かれたまま、傍らに腰掛ける黒髪の少年を凝視した。少年特有の甲高い、しかし、妙に温かみのある声……。

「お前……、口が利けるのか？」

素直なメイの問いに、少年の口許に悪戯な笑みが浮かぶ。

メイは、膝から崩れるように椅子に身を沈め、前髪を掻き上げた。
「すっかり、騙された」

彼女は小さく笑ったが、その笑みは一瞬で、すぐに、顰めた眉間に掻き消された。

少年は確かに問うてきた。年に似合わぬ、挑戦的な口調で、メイに、彼女が望む平和とは何かと。

その問いが、彼女の胸の奥に燦っていた疑問と焦燥に火を付けた。こんな子供を相手に、と、頭の片隅では思いつつも、メイは言わずにはいらなかった。

「ならば、問う。力に裏打ちされぬ平和など、所詮は夢物語。真の平和とは言えぬ。……違うか？」

少年は静かに椅子を降りた。真っ直ぐ正面からメイと対峙するためだ。その動作は、まさに子供のもの。けれど、その唇が紡ぐ言葉は、この国で、未だかつて誰からも聞くことの出来なかった論理。

「力を持てば、どうなる？ 他国を凌駕する力を得るため、更なる力を望む。そして、最後に訪れるのは戦か？ それで多くの罪なき民の血が流される。それを、あんたは平和という名で飾るのか？」

カッとする。しかし、それが、今まで感じたことのない興奮であることも、良く解っていた。

「なら、どうすればいいと言うのだ！ 子供のお前に、いったい何が解る！ 知ったような口を利くな！」

「力を背景にした平和を唱えたところで、誰がそれを真に受けとめる？ 本当の力つてのは、武力じゃないはずだ。親を愛し、家族を愛し、仲間を愛する心こそが、一番強い力になるんじゃないのか？ 国なんて壁を創るから争うんだ。一人ひとりが、一対一、同じ人間として向き合えば、何を争う必要がある？ あんた、何を恐れて

るんだ。この国は永久に平和を宣言した。それは、周辺国にさえ認められているんだ。その国を襲う事は、道義にもとる行為」

少年の、淡々とした静かな語り口。

確かに正論だ。しかし……。

「綺麗事を並べ立てるだけなら、誰にだって出来る！　だが、現実とは違う。力の無いこの国が声高に平和を唱ったところで、力に押さえつけられてしまえば、それまで。そんな小国を、誰が護ってくれるというのだ？　今回のことだって、そうだ。結局、力がなければ、ルーヴェラントはタイの申し出を跳ね除けることなんかできない。自分を護る力を持つていけばこそ、望む平和が手に入るのだ」

無意識に長椅子の肘当てを拳で強く叩く。そんな己に恥じ入るように、メイは俯いた。影となった唇が、微かに言葉を紡ぐ。

「力さえあれば……、私だって普通の女として、普通の恋をして、人並みの人生を歩む事ができたはず……」

しかし、それは明確な言葉の態を成さなかった。

メイの姿をどう思ったのか、少年の静かで辛辣な言葉は続く。

「王は、国民のためにこそ存在する。国を平和に維持するために他国に諂うことの何処がいけない。いや、平和を望むのに、そんなに卑屈になる必要などないんだ。声高に平和を謳いあげればいい」

諂い、卑屈……。

それらの言葉が、メイのかんに障る。顔を上げた瞬間に口にした言葉は、自分でも驚くほどに荒ぶっていた。

「謳うだけで平和が手に入るといふなら、声が枯れるまで謳うとも！　しかし、力で押さえつけられた時、望む平和のために、今のルーヴェラントに何がができる？　それこそ、王として最低ではないか！」

「力を望む者が、望む力を得たら、次はいったい何を望む？　権力への欲望か？　そして、多くの罪無き人々の血が流されるのか？　お前に、血を流す覚悟があるのか？」

悔しい。こんな子供にいいようにあしらわれて！　感情が高ぶる。

それすらも悔しい。

「なら、王族の者は、いくら泣いてもいいと言うのか？ 国のために犠牲になれと？ 冗談じゃない！」悔し涙が目尻に滲む。それすら気付かぬ程に、メイの感情は高ぶっていた。「そんなの、力があるから言えるのだ。力を持たない者の気持ちなんか、お前に解るものか。金のルーヴェは、大バカ者だ！」

次の瞬間、頬に鋭い痛みが走る。

我に返ったメイの眼前に、両脚を肩幅に開き、仁王立ちする少年の姿があつた。彼は上目遣いでメイを睨んでいた。

「バカ野郎！ お前こそ、レノワの苦しみなんか何も知らないくせに……。お前にレノワを非難する権利があるとも思ってたのか？」漆黒の瞳の奥に揺らめく深い哀しみ。それが、メイの心を揺さぶる。「ルーヴェラントは堂々と平和を唱えていけばいいんだ。国を護り、導く立場のあんたが心を乱されてどうすんだよ！」

頬にそつと指先を滑らせる。まだ痛い。しかし、なぜか怒りは沸いてこなかった。逆に、気持ちが落ち着き、後悔ばかりが胸を塞ぐ。

「……子供のくせに、生意気なことをいう奴だ」

がつくりと肩の力が抜ける。

長椅子の背にもたれ掛かれ、眼の前には降るような星空が広がっている。

ふと思う。自分は何時から星に願うことをやめたのだろう。母が身罷り、父が病に伏した時、それでも、平和という名の甘い夢に縋ろうとする姉妹達に不安を覚えた。現実を見る眼は、自分しか持っていないんだ。王子が産まれない以上、自分がその代わりを務めなければ……。そんな諦めにも似た思いで、長かった髪をばつさりと切った。服装も、言葉遣いも男を真似た。世の中を、真つ直ぐに見るのはやめた。そして、知らぬ間に、そんな風にしか全てを見られなくなっていた。

「……そうだな。お前みたいに真つ直ぐに考えられたら、本当に良いな。……だが、今、世の中は、そう簡単には出来ていないんだ。」

国と国との利害の前では、人間の命など虫けら同然。哀しいけれど、それが現実なんだ」

言い置いて、小さく笑う。なぜかとても気分が良かった。心地よい夜風のせいだろうか……？

「お前、変な奴だ。全然子供らしくない。でも、……ありがとう。お陰ですつきりした。こんな事、城の誰にも言えなかったから」

暫し視線を巡らした後、少年へと落とす。今の今まで見上げていたのと同じキラキラと輝く夜空が、そこにあった。

「お前、名は？」

答えないかと思った。けれど、予想に反して帰ってきた素直な答え。

「……サリオ」

「サリオか。……良い名だな」

再び、吸い寄せられるように視線は星空へ。その直後、大空を光りの尾が横切った

（平和を……。）

咄嗟に祈っていた自分に気付く。でも、今だけは、どんな夢でも叶うような気がした。

そつと眼を閉じ、心の奥で繰り返す。

（この国の平和が、何時までも続きますように……。）

その時、彼女の横顔をじっと見つめるサリオの視線に、メイが気付くことはなかった。

その日から三日三晩、メイは自室に隠り、悩み続けた。その間、誰に相談することもしなかった。病床の父はもちろん、姉妹達にすら。

相談すれば、答えは解っている。皆、自分が行くと……、犠牲になると言うだろう。

それは、決して悲惨なことではない。ルーヴェラントの王家に産まれた女としては、長い歴史の中で繰り返されてきたこと。たまたま、行く先がタイになっただけ。そう思えばいいのだから、と……。

しかし、メイは納得できなかった。誰も犠牲にはしたくなかった。そう……、自分以外には。

散々に悩んだ挙句、メイは再び、自らタイへ赴くことを決めた。姉妹達はもちろん、家臣達も止めた。けれど、メイは聞き入れなかった。自分が下した結論には、自分で責任を取らなければ。それが、自分に出来る唯一のこと。

供の数も、持参する荷も最小限にとどめた。それは、とても一国の皇女の旅行列には見えない質素さだった。まるで、帰ることを考えぬ旅支度。そう噂する者さえいた。

屈強な家臣達の中、ただ一人だけ異質な人物が紛れていることに気付く者は数少なかった。それは、黒のチェスパに身を包んだ黒髪の少年。……サリオだった。メイが是非にと望んだのだ。

「サリオ。お前も一緒に来てくれないか？」

旅の前夜、サリオに与えた部屋を自ら訪ね、メイは躊躇いがちにそう言った。

ベッドに寝転がり、面倒くさそうに片眼を開けるサリオ。

「なぜ……？ 俺は、所詮、ただの子供だぜ」

つつけんどんな言葉の裏で、その口許に愉快そうな笑みが零れていることをメイは見逃さなかった。

「ただの子供は、そんなことは言わないと思うが……」ベッドの隅に腰を下ろし、真上から黒の瞳を覗き込む。「正直、不安なのだ。

……ダメか？」

サリオは小さく息を吐くと、勢いよく躰を起こし、胡座を掻いた。

「……行ってやるよ。昔から、女の頼みは断れない性格でね」
からかうような口調。

メイの顔にも、自然と笑みが浮かぶ。

「生意気な奴」

「あんたこそ、な」

くすくすと、小さく笑い合う。

今、この一時は忘れよう。押し寄せる運命も、辛い明日も。
サリオの笑顔に、メイはそう思った。

第5章 選択の未来

「お断りいたします」

きつぱりとしたメイの言葉に、チタールが、その細い眼を見開く。
「それがどういう結果をもたらすことになるのか、承知された上で
言っておられるのでしょうか」

「ですから、私が！」メイは、一步にじり寄った。「私が、このま
まこの城に残ります。ですから、妹達は、どうかご容赦を……」

「ならん！　ならん、ならん！」叫ぶと同時に、チタールは椅子か
ら乱暴に立ち上がった。「政は子供の遊びではないのだぞ、メイ皇
女。侮りに屈するほど、我がタタイは甘くはないぞ！」

「侮りなど……！」

必死に言い続けるメイ。しかし、チタールは聞く耳を持たなかった。
「ルーヴェラントには、既に神の力など存在していない。我等タタ
イは、ここに宣言する。ルーヴェラントに攻め入り、その国土を我
が物とすることを！」

青ざめ、軀中を小刻みに震わせるメイを見下ろし、チタールは二
タリと笑った。

「ルーヴェラントは終わりだ。それもこれも、メイ皇女、そなたの
誤った判断のせい。即刻国に引き返し、泣いて民に詫びるのだな」

「そんな……」

甘かったのか？　自分の勝手な判断が国を滅ぼすことになってし
まうのか？

いや、そうではなかったのだ。そもそも、これこそが、初めから
タタイの狙いだったに違いない。無理難題を押しつけ、それを拒否
したルーヴェラントに攻め入り、力で我が物にする。自分は、その
策略にまんまと乗せられてしまったのだ。

タタイの卑劣さを見くびっていた自分が、酷く情けない。

がつくりと肩を落としたメイの頭上に、チタールの下卑た笑い声が降り積もる。続く言葉は、その考えを裏打ちすると同時に、彼女を地獄へと叩き落とした。

「そんなに悲観することはないぞ、メイ皇女。教えてやろう。そなたが首を縦に振るうが、横に振るうが、結果は変わらんのだ。我が申し出を承知すれば内部からジワリジワリと、拒否すれば武力を持つて、貴国を我が物としただけのこと。それが政の駆け引きというものよ」

目の前が真つ暗になる。

床の上の握り拳がカタカタと震えた。

もう、終わりだ。

ルーヴェラントの平和は、もう潰えるのだ！

その時……。

不意に優しい温もりが肩に触れた。

顔を上げたメイの瞳に飛び込んできたのは、星空を切り取ったように煌めく双眸。

「メイ。そんな奴に頭を下げる必要なんかねえぞ」

壇上のチタールにまで届く声で、サリオは言った。

完全な圧勝を確信していたのだろうチタールにとっては、想定外の反抗的な物言い。怒りの余り、カッと頬が朱を帯びる。

「何奴か！ 下がれ、無礼者め！」

裏返った金切り声で叫んだ。しかし、次の瞬間、彼は息を呑み、口を噤んだ。

顔を上げたサリオの視線の強さに気圧されたのだ。

サリオは真つ正面からチタールを睨み付けつつ、一步、また一步と、壇上へと歩を進めた。呟くような言葉は、しかし、壇上に有りながら怯えた眼で少年を凝視する男と、その取り巻き達の耳に届くには十分な響きを帯びていた。

「俺は、あの日、レノワに約束した。レノワが築いた平和の国を見守っていくと。ルーヴェラントを、戦いの渦に巻き込もうとする奴

は、……俺が許さない」

その瞬間、突如、サリオの足許で風が緩く舞った。それは徐々に大きくなり、ついには、漆黒の髪を靡かせるほどに強い風の渦となった。

渦の中心に佇んだまま、サリオがゆっくりと両腕を上げる。掌は真っ直ぐにチタールへと向けられていた。

「あんたさ、言ったよな、ルーヴェラントの神の力は既に存在しないと。それ、間違ってるぜ。そんなに言うなら、……今、この場で見せてやるよ。ルーヴェラントの真の神の力ってヤツを……」

突如、激しい振動が城全体を包んだ。

崩れる岩壁。鼓膜に突き刺さる絶叫と悲鳴。

逃げなければ！ そんな思考に逆らい、遠退く意識。葛藤の中でメイは感じていた。躰の上に覆い被さり庇ってくれる温もりの確かさ。その掌は、自分の物より二回りも小さいくせに、なぜかひどく安心できる強さをはらんでいたことを……。

ひどく眠い。躰中が疲れ切って動くことがおっくうだ。

しかし、躰の重さに反し、脳は訴える。思い出さなければいけない何かがあつたはず……。考えなければ……。思い出さなければ……。…。

重い瞼をゆっくりと持ち上げる。

焦点の定まらない視界。何度か瞬きをするうちに、次第に輪郭を際立たせる風景。

見覚えがある。ここは何処だ？ ぼんやりとする頭で、必死に考える。

ああ、そうだ。思いだした。ここはルーヴェラント。城の背を護

るポーの森。小さい頃の遊び場だった平野だ……。ひどく懐かしい。首を回す。

傍らに胡座を掻く小さな影。草を噛む横顔に、ひどく安堵する。「だい、じょうぶ、……か？」

少し掠れた声で問う。

メイが眼を覚ましたことに気付き、少年は草を吐き出した。彼女の問い掛けを別の意味に取ったようだ。ニヤリと笑う。

「ああ、大丈夫だ。あいつは何も覚えちゃいない。地震で城が崩れた。せいぜい、そう思うくらいさ。心配する必要はねえよ」膝を抱え、座り直す。「結局、俺、あんたのこと、とやかく言えねえよな。俺がしたこと自体、力に頼ることだもんな。これじゃ、レノワに顔向けできねえや」

横顔しか見えないが、そこに苦渋の笑みが浮かんでいることに、メイは気付いた。

「お前……、何者？」

微かな問い掛けは、しかし、あっさりとかわされる。

「俺のことなんか、どうでもいいだろ。それより、これで、周辺国は当分動かない。ルーヴェラントの神の力は噂になるだろうからな」静かな漆黒の眼が、上からじっとメイを見据えた。「その間に、あんたには何ができる？」

「え？」

「暫くは続くだろう平和の間に、次の平和に繋げるため、あんたは何かできる？」

「何が、って……」

怠いと叫ぶ我が身を叱咤し、軀を起こす。それによって、サリオとの視線の上下位置が逆転する。

膝を抱え、空を見上げてサリオは言った。

「俺はさ、レノワの判断は正しいと、今も信じている。だけど、それは所詮、三百年前のことだ。今の世界には当てはまらないのだといわれれば、そうなんだろうと納得するしかないや。俺達は、もう、

遙か昔に消えた伝説でしかない。なら、伝説は伝説らしく、おとなしく引き下がるしかねえんだろうぜ」

サリオの言っていることが、よく理解できない。何度か頭の中で反芻しながら、メイはのろのろと軀を動かし、彼と同じ姿勢を取るふと気付けば、眼の前には茜に染まった大空と、地平線に半分隠れた金色の太陽。こんなふうに夕陽を見たのは何年ぶりだろう。なぜか、泣きたいほどに美しいと思った。

「なあ……」

躊躇い気味にサリオが声を掛ける。

「なに？」

「どうせ、怒られついだから、……さ」

サリオは膝をついて伸び上がると、メイの額に手を添えた。

「あんたが、真の平和を望むと約束するなら、……あんたが望む……くれてやるよ。もう俺には必要ないし。それで、あんたが望むものが手に入ると本気で思っているんなら、試してみればいい」
軀のままの小さな手。ひどく温かい。その温かさのままの何かが、額から軀の中に染みこんでくるような気がした。

不意に目頭が熱くなり、瞼を閉じる。

零れそうになるものを必死に堪えていると、耳許に笑いを含んだサリオの声が聞こえた。

「言つとくけどさ、俺は女が弱いと思ったことなんて一度もないぜ。少なくとも、俺の母さんは、強かった。……親父の口癖だけだな」

一瞬の沈黙の後、サリオが立ち上がる気配を感じた。

ふと不安に駆られ、眼を開ける。だが、突如吹き抜けた突風に、メイは再度眼を閉じずにはいらなかった。

「俺の役目は終わった。もう、俺にできることは何もないや。……がんばれよ」

風はサリオの声さえも掻き消してしまう。

「待って、サリオ！ レノワ……、レノワって、もしや……」
必死に声を出す。

けれど、風がやみ、メイが再び眼を開けた時には、そこには既に、サリオの姿は無かった。

茫然とするメイ。その脳裏に、ふと、ある言葉が浮かんで消えた。
（国、真に困窮し時、夜の神再び現れ、必ずや国に力をあたえるであろう……）

「金のルーヴェの名は、確か……、レノワ。サリオ、お前は……、
いいえ、貴方は、もしか……」

しかし、メイの囁くような呟きに応える者は、誰もいなかった。

降るような星が瞬く夜空の下。

ルーヴェラントが見渡せる丘の上に、独りの少年の姿があった。

艶やかな黒髪が風に靡く。誰に語るともなく、少年は呟いた。

「なあ、レノワ。お前が最期の日、流れた星にかけた願い、俺は、
それを叶えてやりたかった。そのために、長い時を漂ったよ」

サリオの耳に、遠い日のレノワの声がはつきりと甦る。

『サリオ。私の命は、もう長くは無い。それは、私自身が一番良く
解っている。私は、人としての短い生を、精一杯に生きた。自分が
信じる未来のために、できる限りのことをしたつもりだ。けれど……
…、今、私の心には、一つの疑問が芽生えてしまったのだ。……私
達が望んだ平和は、果たして正しかったのだろうか。武力を否定し、
力を否定することこそが、真の平和に繋がるのだと、そう信じた私
達が描いた未来の姿は、本当に正しかったのだろうか。今さら悩ん
でもしかたないと、お前は笑うのだろうか。どんなに惑っても、私
には、それを見届けることはできないのだから。けれど、だからこ
そ、最期の力を込めて星に願うよ。どうか、サリオ、命尽きる私の
変わりに、この国の未来を見届けてくれ。そして、もし、力ないこ

とに迷い、平和に迷った者が現れた時には、導いて欲しい。貴方が一番正しいと思う未来へ……」

「一番正しい未来……。お前は、そう言った。だが、俺にも解らなくなっちまったよ。正しい未来。そんなものが本当にあるのか。お前と俺が望んだ平和の国は、お前が迷ったように、夢物語でしかないだろうか、……。なんて、な」

風に乗り、自分の耳届いた自分の声に、独り、強く首を横に振る。「いや……。そんなこと、あるわけが無いよな。ルーヴェラントの人々の顔には、何時だって笑みがある。それに、嘘のあらうはずがない」

軀を反らし、星空を見上げる。

「俺達の役割は、もう終わった。次の時代は、次の時代に生きる奴等に任せようと思う」星屑を鏤めたかの如き漆黒の瞳が、そこに何かを探すように彷徨う。「レノワ。今更ながら、お前の苦悩、ほんの少しだけ解った気がするよ。やっぱりお前は、立派な王だった。俺なんかには、到底無理だ」

その視線が、何かを見つけたように一点で止まる。その時、サリオの顔には、満足気な笑みが浮かんでいた。

「これでやっと、俺もお前の許に行ける。お前は、俺をなんとして迎えてくれるだろうか。小言なら、後でいくらでも聞いてやる。だから、今だけは、お前の膝で眠らせてくれ……」

メイがルーヴェラント初の女王として君臨してより百年後、ルーヴェラントは歴史からその名を消した。

それが、戦いによって滅んだためののか、力により領土を拡大して名を変えた故なのか、今では、それを知る術はない。

だが、長い歴史の中で、人々は一つの事を学んだ。

平和を望まぬ者はいない。

しかし、天を眺め、神の奇跡を待つだけでは、平和を維持する事はできない。

権力者達の欲にまみれた戦いと欲望から、平和の花は咲かない。

望みを叶えるためには、手を携えあい、自ら行動しなければなら
ないのだという事を……。

流れ星はね

夜の神様から月の神様への贈り物

だから

星に懸けた願い事は
何時か星が流れる時
きっと叶うんだよ

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8455a/>

十二人の姫君

2010年10月12日02時58分発行